

連用形が名詞化できる語彙的複合自動詞の特徴に関する一考察

瀋豊丹 (名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程言語学分野・専門)

要旨

本稿では、データベース「複合動詞レキシコン」において格関係が「VV型」の語彙的複合自動詞を中心にその連用形が名詞化する状況を統計的に分析した。その上で、名詞化できる語彙的複合自動詞の特徴に注目し、語彙的複合動詞を持つ多様な内在構造の視点から考察を行った。辞書とコーパスの両方で連用形が自立的に名詞化できることが確認できた語彙的複合自動詞を対象に、三つの視点から調査し、名詞化できない語彙的複合自動詞と対照した結果、次の三点が見出された。①語彙概念構造の視点から見れば、全体として非常に偏った分布が見られ、特に全体の七割近くを占める「手段・原因」のタイプが圧倒的に多い傾向がある。この視点が名詞化可能の語と名詞化不可の語にある差を最も反映している。②名詞化できる語彙的複合自動詞は名詞化できない語より前後項動詞が独立して名詞化しやすい傾向がある。③他動性調和の原則によって、語彙的複合動詞の意志性により異なる傾向が見られ、意志的複合自動詞と非意志的複合自動詞はそれぞれ「非能格自動詞+非能格自動詞」と「非対格自動詞+非対格自動詞」のパターンが最も多い。一方で、名詞化できない語彙的複合自動詞と大きな差異が見られず、この点については更に考察する必要がある。

1. はじめに

西尾 (1961) と影山 (2011) は、動詞の連用形をそのまま名詞として使うこと、即ち名詞に転成することが日本語で最も簡単な動詞を名詞化する方法であると指摘している。それは単純動詞でも複合動詞でも同じだと思われる。「扱い、動き、悩み」のような単純動詞、また「底抜け、草取り、砂遊び」のような「名詞+動詞」などの複合語の連用形の名詞化に関わる研究には、代表的なものとして西尾 (1961)、鈴木 (1964)、玉村 (1970) などがあるが、「動詞+動詞」型の複合動詞の名詞化、即ち複合動詞の連用形が名詞に転成する現象についての研究はあまり見られない。例えば、次のような例である。

- (1) 忍び泣く、移り変わる (3) 忍び泣き (○)、移り変わり (○)
(2) 消し飛ぶ、遊び暮らす (4) 消し飛び (×)、遊び暮らし (×)

例 (1) の語彙的複合動詞の連用形 (3) は辞書とコーパスによって、名詞に転成することが確かめられるが、(2) の語彙的複合動詞の連用形 (4) は名詞として使うことができない。本稿では、例 (1) と (2) のような「VV型」語彙的複合自動詞を中心に上げ、それらの名詞化状況を考察し、連用形が名詞化できる「VV型」の語彙的複合自動詞が持つ特徴をまとめる。

本稿は国立国語研究所によるデータベース「複合動詞レキシコン」を用いて研究を行う。このデータベースは、現代日本語でよく使われる動詞+動詞型の語彙的複合動詞だけを収録している。「複合動詞レキシコン」に収集された動詞+動詞型の複合動詞は、さらに複合動詞の語構造 (前項動詞と後項動詞の格関係を表示) により四種類 (「VV型」「Vs型」「pV型」「V型」) に分類することができる。また、品詞性に基づき、自動詞 (意志的と非意志的) と他動詞に分けられる。本稿はそれらのうち「VV型」の自動詞 (全て 508 語) に注目し (「VV型」の他動詞の部分は別稿で準備している)、それらの複合動詞の連用形が名詞に転成する状況を考察し、名詞化できる複合動詞が持つ特徴を分析する。

2. 先行研究と問題の所在

日本語の複合動詞に関する研究は長い間盛んに行われてきた。松田（2002）は複合動詞に関わる多様な研究を主に以下の四つに分けてまとめた。それは、それぞれ複合動詞の結合条件、分類などに関する「体系的研究」、そして複合動詞後項の意味的側面に関する「意味的研究」、また「他の言語との対照研究」と「習得研究」である。前節に述べたように、本稿の研究対象は全て語彙的複合動詞であるため、ここでは、本稿が扱う語彙的複合動詞の分類や結合条件などについての体系的な研究と複合動詞の前後項の意味関係に関する意味的研究を概観する。

2.1 語彙的複合動詞の分類や結合条件に関する体系的研究

語彙的複合動詞の分類や結合条件に関する代表的な研究には影山（1993）がある。影山（1993）は、抽象性の高い「概念意味論」の枠組みで分析を行い、その後他の研究者に批判的に継承されている。

影山（1993）は「語形成」という観点から複合動詞を扱い、複合動詞を「話し始める、働きすぎる」などのような補文関係をとる「統語的複合動詞」と「飛び上がる、泣き叫ぶ」などのように補文関係をとらない「語彙的複合動詞」に分類した。影山（1993）は動作の主語を「外項」、目的語を「内項」と呼び（これを自動詞に当てはめた場合、意志自動詞の主語は「外項」、無意志自動詞の主語は「内項」に相当する）、日本語動詞を他動詞、非能格自動詞と非対格自動詞の3種類に大別する。簡単に言えば、非能格自動詞は主に生物の意志的活動を表すが、非対格自動詞は人間の意志的作用がかかわらない、自然発生的ないし自発的な出来事を表すのである。

- ① 他動詞の項構造： $x < y$ 例：割る、読む
- ② 非能格自動詞の項構造： $x < >$ 例：走る、歩く
- ③ 非対格自動詞の項構造： $< y$ 例：割れる、折れる

そして、影山（1993）は、「語彙的複合動詞」の組み合わせは基本的に外項の有無、つまり外項を取る動詞同士か、外項を取らない動詞同士によって作られるという「他動性調和の原則」を主張した。しかし、後項動詞に方向性を示す「込む」をとる「駆け込む」のように、「他動性調和の原則」を逸脱する例も見られる。そのため、影山（1993）は、「他動性調和の原則」は項構造レベルの複合動詞に対しては保持することができるが、「込む」を後項にとるような複合動詞は、語彙概念構造のレベルで形成される語であることから、「他動性調和の原則」に違反する場合があると指摘している。

2.2 語彙的複合動詞の前後項の意味関係に関する意味的研究

複合動詞の前後項の意味関係に関する研究には、由本（1997）などがある。

由本（1997）は「語彙概念構造」(Lexical Conceptual Structure, LCS)の理論に基づいて、語彙的複合動詞の前項と後項の意味関係を以下の四つのパターンに分けた。(pp.73-78)

- ・並列関係（例：泣き叫ぶ）
- ・付帯状況（例：遊び暮らす）
- ・手段・原因（例：切り倒す、泣きはらす）
- ・補文関係（例：寝付く）

その上でそれぞれのパターンに関して意味論的制約があると指摘した。

2.3 問題の所在

語彙的複合動詞と動詞連用形の名詞化の先行研究はそれぞれ語形成の「複合」と「転成」のパターンを多様な視点から取り上げているが、「複合」＋「転成」の関連領域についてはあまり触れられていない。そこで、本稿では「動詞＋動詞」型の語彙的複合動詞の前後項動詞の組み合わせのパターン、意味関係の分類や前後項動詞自身の連用形名詞化の状況という視点から、連用形が名詞化できる語彙的複合自動詞の特徴を考察する。

3. 研究対象語とその研究方法

3.1 研究対象語とその抽出

本稿では、「複合動詞レキシコン」から「遊び暮らす、動き回る、言い争う、語り明かす、食い付く」と「遊び疲れる、凍え死ぬ、生まれ育つ、滑り出る、焦げ付く」のような「VV型」¹の意志的自動詞と非意志的自動詞全て（508語）を抽出して研究対象語とする。このタイプの語彙的複合自動詞を中心に、その連用形の名詞化の状況を統計的に分析して、「VV型」語彙的複合動詞の内在構造の視点から名詞化の実現に関わる要因や制約などを考察する。

3.2 本稿で扱う辞書とコーパス

本稿で使う辞書は「Dual大辞林」であり、三省堂が2006年10月27日に刊行した『大辞林 第三版』のウェブバージョンである。「Dual大辞林」は『大辞林 第三版』のウェブバージョンとして、紙バージョンの内容を全て保持した上、2015年7月に更新され、総項目数は約26万5000に達している（紙バージョンは23万8千項目）。現代語を中心とした大型国語辞書として、項目数が多く、新しい語彙も登録されているため、本稿で抽出した対象語の連用形名詞化の状況の考察とその後の前後項についての意味関係の分析、分類などに適切だと考えられる。そして、本稿で使用するコーパスは主に『KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese、以下では略称「BCCWJ」）である。検索ツールとして中納言とNINJAL-LWP for BCCWJを使用する。「BCCWJ」は国立国語研究所が構築した現代日本語の書き言葉のコーパスであり、書籍、雑誌、新聞、ブログ、ネット掲示板、教科書などのジャンルの1億430万語のデータを網羅する。

3.3 研究の方法と目的

まず、「複合動詞レキシコン」から「VV型」複合自動詞を全て抽出し、抽出した複合自動詞を連用形の形にする。そして、その形が、辞書「Dual大辞林」とコーパス「BCCWJ」に名詞として存在するか否かを検索する。検索の結果、辞書とコーパスの両方で自立的に名詞として存在することが確認された複合自動詞を本稿の研究対象とする。

これらの複合自動詞を第2節の先行研究の項で述べた語彙的複合動詞に適用される二つの方法で分類し、その特徴を考察する。まず、2.1節で述べた影山（1993）の「他動性調和原則」によって語彙的複合自動詞を非能格自動詞と非対格自動詞に分類する。次に、2.2節で触れた由本（1997）の語彙概念構造に基づく語彙的複合動詞の前項と後項の意味関係で複合自動詞を分類する。最後に、複合動詞の前項と後項のそれぞれにつ

¹ 「複合動詞レキシコン」の語構造成類の説明によれば、収集された複合動詞は、「VV（動詞＋動詞）型」「Vs（動詞＋補助的な動詞）型」「pV（接頭辞型化した動詞＋動詞）型」と「V（一語化）型」の4種類に分類され、それぞれ品詞類として他動詞、自動詞と自動詞（意志的）に分けられている。その中で、「VV型」複合動詞は「2つの動詞がそれぞれ本来の意味と格関係を持つ」ため、最も典型的な複合動詞と考えられる。

いて連用形名詞化の可否を辞書「Dual 大辞林」で確認し、それによって語彙的複合自動詞を分類することで、連用形を名詞に転成できる語彙的複合自動詞にはどのような内在的特徴があるのかについて考察する。

4. 「VV 型」の語彙的複合自動詞の名詞化状況の考察

4.1 「VV 型」の語彙的複合自動詞の抽出

まず、国立国語研究所の「複合動詞レキシコン」から、「VV 型」の語彙的複合自動詞 508 語を研究対象語として抽出する。データベースの分類基準によれば、意志的自動詞である語彙的複合動詞は 200 語であり、非意志的自動詞である語彙的複合動詞は 308 語であった。

4.2 「VV 型」の語彙的複合自動詞の名詞化状況

4.2.1 辞書によって抽出された語彙的複合自動詞の名詞化状況

辞書「Dual 大辞林」におけるこれらの複合動詞 508 語の名詞化状況を確認した結果、「名詞化可」（辞書に複合動詞の連用形が自立的な名詞の語彙項目として存在する）、「条件付き可」（複合動詞の連用形自体は非自立で、補助形態素を加えたものが名詞の語彙項目として存在する）と「不可」（複合動詞の連用形はどんな形式でも名詞の語彙項目として存在しない）に分類した。また、一部の語（145 語）は複合動詞自体が辞書に立項されていないため、「複合動詞が立項なし」と表記した。

表 1 「Dual 大辞林」による語彙的複合自動詞の名詞化状況

	名詞化可	条件付き可	不可	立項なし	計
意志的自動詞	25	1	130	44	200
非意志的自動詞	37	2	168	101	308
計	62	3	298	145	508

上の表 1 に示したように、語彙的複合自動詞のうち、その連用形が単独で名詞の語彙項目として成立することが辞書「Dual 大辞林」によって確認できる動詞は 62 語であるが、このうち「起き上がり小法師、沈み込み帯、吹き出物」のようにほかの形態素を加えて初めて名詞の語彙項目として成立するものが 3 語ある。また、複合動詞の連用形が自立した形式としても補助形態素を加えた形式としても名詞の語彙項目として辞書で確認できないものが 298 語ある。さらに、「複合動詞レキシコン」のデータベースでは複合動詞として認められているが、辞書では立項されていない語は 145 語であった。この 145 語のうち、「泣き寝入る、煮崩れる、焼け焦げる」の 3 語は、複合動詞自体が辞書に見つけられない一方、「泣き寝入り、煮崩れ、焼け焦げ」の形で複合名詞の項目としては存在している。これらの複合動詞は、名詞から動詞に転成する「逆形成」によって形成されたと考えられ、それらの複合名詞を複合動詞の「連用形名詞の語彙項目」として認めることは難しい。したがって、本稿の研究対象から除外する。

4.2.2 コーパスによって抽出された語彙的複合自動詞の名詞化状況

複合動詞の連用形名詞化の結果を別の観点から検証するため、抽出された 508 語の語彙的複合動詞がコーパス（BCCWJ）に出現するかどうかを確認し、名詞化の状況を「名詞化可」（複合動詞の連用形が自立的な名詞として使われた用例がある）、「条件付き可」（複合動詞の連用形に補助形態素を加えたものが名詞として使われた用例がある）と「不可」（どんな形式でも複合動詞の連用形が名詞として使われた用例が見られない）の 3 種類に分け、その結果を表 2 に示した。

表2 「BCCWJ」による抽出した語彙的複合自動詞の名詞化状況

	名詞化可	条件付き可	不可	計
意志的自動詞	31	1	168	200
非意志的自動詞	42	0	266	308
計	73	1	434	508

上の表2に示したように、「BCCWJ」によって、連用形が自立的に名詞化できる用例を確認できた語は73語あり、ほかの補助形態素を加えて名詞として使われる用例が確認できた語が1語あった。これを表1から得られた結果と比べると、全体として、複合自動詞の連用形が名詞に転成できる比率は低く、名詞化可能な複合自動詞は自立性が高いという点で傾向が一致している。

4.2.3 抽出された語彙的複合自動詞の名詞化状況のまとめ

4.2.1の表1と4.2.2の表2を比べると、複合自動詞508語の中で、46語は辞書とコーパスの両方で名詞化できることが確認できるが、相違点もある。以下の表3を用いて確認する。

表3 辞書とコーパスによる抽出した語彙的複合自動詞の名詞化状況のまとめ

名詞化の状況		語彙的複合自動詞	
辞書だけで確認できる: 22語	名詞化可: 21語	意志的自動詞: 4語	浮かれ歩く、駆け入る、飛び乗る、寄り掛かる
		非意志的自動詞: 17語	行き通う、写り込む、落ちこぼれる、凝り固まる、差し入る、吸い付く、すすり泣く、振り返る、立ちすくむ、飛び出る、煮こぼれる、寝ぼける、引きこもる、引きつる、吹きこぼれる、咽び泣く、行き通う
	条件付き可: 1語	非意志的自動詞: 1語	吹き出る
辞書とコーパスのいずれでも確認できる: 46語	<u>辞書とコーパスのいずれでも名詞化可: 44語</u>	意志的自動詞: 21語	歩み寄る、言い争う、生き残る、討ち入る、駆け込む、食い付く、忍び会う、忍び泣く、立ち退く、立ち回る、付き添う、飛び上がる、飛び下りる、飛び込む、取り付く、殴り込む、乗り越す、乗り込む、見回る、向かい合う、寄り集まる
		非意志的自動詞: 23語	行き止まる、生き別れる、居残る、移り変わる、生い立つ、落ち込む、返り咲く、切れ込む、焦げ付く、凍え死ぬ、死に別れる、滑り込む、出来上がる、通り抜ける、成り上がる、跳ね上がる、跳ね返る、引っ込む、触れ

			合う、結び付く、持ち上がる、盛り上がる、行き当たる
	辞書では条件つき可で、コーパスでは名詞化可：2語	意志的自動詞：1語	起き上がる
		非意志的自動詞：1語	沈み込む
コーパスだけで確認できる：29語	名詞化可：22語	意志的自動詞：8語	追いつく、勝ち上がる、組み付く、忍び込む、立てこもる、乗り移る、走り込む、振り向く
		非意志的自動詞：14語	移り行く、生まれ育つ、思い当たる、折れ曲がる、食い込む、繰り上がる、繰り下がる、ずれ込む、垂れ下がる、溶け込む、寝返る、舞い上がる、焼き付く、焼け出される
	辞書で複合動詞が立項なし：7語	意志的自動詞：3語	駆け比べる、踏み入る、泣き寝入る
		非意志的自動詞：4語	飛び入る、跳ね込む、煮崩れる、焼け焦げる

表3にまとめた結果を見てわかるように、辞書とコーパスはそれぞれ規範性と実用性を反映しているため、名詞化の可否については異なる結果が得られた。本稿は客観性と信頼性の両面を考慮に入れて、両方で名詞化できることを確認した複合動詞に注目する。また、両方で名詞化できる46語のうち語彙的複合自動詞「起き上がる、沈み込む」については、コーパスでは自立的に使われた用例が見られるが、辞書では確認できない。基準を統一するために、辞書で確認できない「起き上がる、沈み込む」は除外し、辞書とコーパス両方で自立的な名詞化が確認できる語彙的複合自動詞44語を中心に内在的な特徴を考察して分析する。(図1を参照)

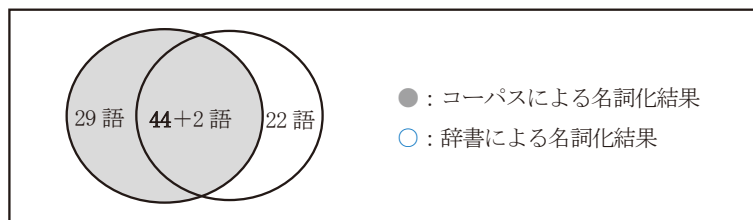


図1

5. 連用形が名詞化できる語彙的複合動詞の特徴についての調査結果

5.1 「他動性調和の原則」の視点から見る

先行研究のまとめ(2.1節)で言及したように、影山(1993)は項構造によって、動詞を「他動詞」「非能格自動詞」と「非対格自動詞」の三種類に大別した。さらに、語彙的複合動詞の形成に際し、項構造におい

て共通性を持つ二つの動詞が結合するという「他動性調和の原則」が一般的に存在すると指摘した。即ち、他動詞は他動詞および非能格自動詞と結合でき、意志的な非能格自動詞は非能格自動詞とも他動詞とも結合できるが、非意志的な非対格自動詞は非対格自動詞のみと組み合わせさせて、語彙的複合動詞を形成するのである。本節は、この他動性調和の原則に基づいて、抽出された語彙的複合自動詞をそれぞれ四つのタイプに分類して、名詞化できる語彙的複合自動詞にある項構造の組み合わせの特徴を考察する。各タイプによって名詞化できる語彙的複合自動詞を分類した結果を表4に示す。

影山は「非対格自動詞と非能格自動詞」即ち自動詞の意志性の有無に対する具体的な分類基準について言明していないため、複合動詞の前項か後項が自動詞の場合、本稿では以下の基準で分類する。①辞書「Dual大辞林」による複合動詞の意味を前項後項動詞の意味と対照し、前項後項動詞から継承された意味で判断する。②①の基準で判断しにくい場合、特に前項後項動詞に意志的・非意志的な場合の両方が可能である場合は、複合動詞を「NINJAL-LWP for BCCWJ」²を用いて検索し、その中の共起パターンから使用頻度が高い順に例文を見ながら判断して分類する。例えば、「生い立つ、移り変わる」それぞれの後項動詞「立つ」と「変わる」には意志・無意志の両方の場合があるため、「NINJAL-LWP for BCCWJ」から使用頻度が高い順に例文を出して検討する。例(5)と(6)のような例から、その2語は非意志性を持ち、「非対格自動詞+非対格自動詞」のパターンに該当すると判断できる。

- (5) ・地球の生い立ち、生命の進化の歴史、群馬の自然を紹介している博物館のホームページ。
・とはいえ、二人の生い立ち、革命思想を懐くに至った過程はずいぶん異なる。
- (6) ・この世に生まれたものはすべて移り変わっていく。
・このように、季節が移り変わる地域では、温度・光・水・大気・土壌などの非生物的環境が大きく変動するため、生物の生活は、それに強く影響を受ける。

表4 他動性調和の原則に基づく名詞化できる語彙的複合自動詞のタイプの分布

種類	タイプ	各パターンに該当する名詞化できる語彙的複合自動詞	
意志的自動詞	非能格自動詞+非能格自動詞	9語	歩み寄る、生き残る、立ち退く、立ち回る、付き添う、飛び上がる、飛び下りる、向かい合う、寄り集まる
	他動詞+非能格自動詞 非能格自動詞+他動詞	8語	討ち入る、食い付く、忍び会う、忍び泣く、取り付く、見回る、言い争う、乗り越す
	* ³ 非能格自動詞+分類不能	3語	駆け込む、飛び込む、乗り込む
	*他動詞+分類不能	1語	殴り込む
非意志的自動詞	非対格自動詞+非対格自動詞	12語	移り変わる、生い立つ、返り咲く、焦げ付く、凍え死ぬ、死に別れる、出来上がる、通り抜ける、成り上がる、跳ね上がる、跳ね返る、触れ合う

² 「NINJAL-LWP for BCCWJ」は国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を検索するために、国立国語研究所とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できるのがこのシステムの最大の特長である。

³ 「*」：他動性調和の原則に違反しているパターンである。

	*非対格自動詞＋分類不能	4 語	落ち込む、切れ込む、滑り込む、引っ込む
	*非能格自動詞と非対格自動詞の組み合わせ	4 語	居残る、行き止まる、生き別れる、行き当たる
	*他動詞と非対格自動詞の組み合わせ	2 語	持ち上がる、盛り上がる
	他動詞＋非能格自動詞	1 語	結び付く

意志的自動詞では、「歩み寄る、生き残る」のような「非能格自動詞＋非能格自動詞」のタイプが一番多く（9 語）、次いで多いのが「他動詞＋非能格自動詞の組み合わせ」のタイプ（8 語）である。いずれも他動性を持つ組み合わせであり、名詞化できる意志的複合自動詞の大半は他動性を持つ項構造の語の組み合わせであるといえる。

一方、非意志的自動詞では、「移り変わる、生い立つ」のような「非対格自動詞＋非対格自動詞」の組み合わせが一番多く 12 語あり、名詞化できる非意志的複合自動詞の半数以上を占める。

表 4 を見ると、名詞化できる語彙的複合自動詞の 8 割近くは他動性調和原則に従っているが、原則に違反するのも存在する。まず、意志的自動詞のうち、「非能格自動詞＋分類不能」（3 語）と「他動詞＋分類不能」（1 語）のタイプは、いずれも他動性調和の原則と満たしているかどうか断定できないが、全て同じように後項動詞「込む」を取っている。語彙的複合動詞の後項動詞として、「込む」はある場所の内部に移動する意味を持ち、単独で使うことができない。そして、「駆け込む、飛び込む、乗り込む、殴り込む」の前項動詞「駆ける、飛ぶ、乗る、殴る」そのものは方向性を持っていないが、後項動詞「込む」が付くことで方向性が生まれる。しかし、後項動詞「付く」が前項動詞の「格特性を抑制する」（影山 1993）のと異なり、後項動詞としての「込む」は前項動詞の項構造を受け継がず、自身そのものの項構造を保持し、到達を表す非対格自動詞のまま変わっていない。その点について影山（1993）は、「込む」は複合動詞の後項動詞として機能する時、他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞すべてを前項動詞とすることができ、他動性調和の原則に反するが、それは項構造のレベルではなく、語彙部門内で利用できる語彙概念構造のレベルで処理することができる」と述べている。

一方、非意志的自動詞の中に、前述と同じように後項動詞「込む」をとる「非対格自動詞＋分類不能」のタイプが 4 語あるほか、「非能格自動詞と非対格自動詞の組み合わせ」と「他動詞と非対格自動詞の組み合わせ」のタイプはそれぞれ 4 語と 2 語あり、いずれも他動性調和の原則に違反するが、これらも次節で見るように、語彙概念構造によって説明できる。したがって、本節で述べた他動性調和原則は、語彙概念構造で説明される語例を除けば全ての語彙的複合動詞に適用できることになる。なお、後者「他動詞と非対格自動詞の組み合わせ」に該当する「持ち上がる、盛り上がる」の 2 語にはそれぞれ対応する複合他動詞形「持ち上げる、盛り上げる」が存在し、西尾（1982）と須賀（1983）によれば、これらの複合自動詞（「持ち上がる、盛り上がる」）は対応する複合他動詞形（「持ち上げる、盛り上げる」）から逆形成されたものと考えられる。

5.2 前後項動詞の意味関係から見る

2.2 で触れたように、由本（1997）は語彙概念構造（LCS）の理論に基づき、前後項動詞の意味関係の視点から、語彙的複合動詞を「並列関係」「付帯状況」「手段・原因」と「補文構造」の四類に分けている。本節では、この分類基準を用いて、抽出された連用形が名詞化できる語彙的複合自動詞（4.2.3 節で辞書とコーパスいずれでも名詞化できると確認した 44 語）における前後項の意味関係の特徴を考察する。まず、その意味関係の分類の分布を表 5 に示す。

表5 前後項の意味関係の分類による名詞化できる語彙的複合自動詞の分布

前後項の意味関係の分類	各分類に該当する語彙的複合自動詞	
並列関係	12 語	言い争う、生き残る、立ち退く、付き添う、居残る、死に別れる、出来上がる、通り抜ける、成り上がる、触れ合う、結び付く、盛り上がる
付帯状況	3 語	忍び会う、忍び泣く、生き別れる
手段・原因	29 語	歩み寄る、討ち入る、駆け込む、食い付く、立ち回る、飛び上がる、飛び下りる、飛び込む、取り付く、殴り込む、乗り越す、乗り込む、見回る、向かい合う、寄り集まる、行き止まる、移り変わる、生い立つ、落ち込む、返り咲く、切れ込む、焦げ付く、滑り込む、跳ね上がる、跳ね返る、引っ込む、持ち上がる、行き当たる、凍え死ぬ
補文構造	-	-

表5に示したように、名詞化できる語彙的複合自動詞には「並列関係」「付帯状況」「手段・原因」という前後項動詞の意味関係のタイプが三つあり、「補文構造」に属する語は見当たらない。その中で、「手段・原因」類が最も多く、半数以上を占める。

① 「並列関係」類 ([LCS1] AND [LCS2])

前後項の意味関係が「並列関係」類に属する、名詞化できる語彙的複合自動詞は12語ある。例えば、

(7) 「言い争う」 例：心配のあまり両親は激しく言い争う。

[[x] SAY]+[[x'] QUARREL]→[[[x_i] SAY] AND [[x'_i] QUARREL]]
→ [[x_i] SAY AND QUARREL]

例(7)で前項と後項動詞の意味関係が「並列関係」類に属する「言い争う」の語彙概念構造の合成を示したように、「言い争う」は、前項動詞「SAY」（「言う」を表す意味述語）と後項動詞「QUARREL」（「争う」を表す意味述語）が表す事象が同時に発生する事象であり、そして前後項動詞はいずれも同じ外項「両親」(x_i)をとって、また前項動詞「言う」と後項動詞「争う」が表す事象が全く同等の重さを持っているため、同じ人物によってなされる一つの行為を表す動詞概念となることができる。したがって、「言い争う」のような名詞化できる語彙的複合自動詞は「並列関係」のタイプに該当する。

② 「付帯状況」類 ([LCS1] WHILE [LCS2])

前後項の意味関係が「付帯状況」類に入る、名詞化できる語彙的複合自動詞は3語しかない。例えば、

(8) 「忍び泣く」 例：それまで、黙ってうつむいていた亜希子が、低い声でしのび泣いていた。

[[x'] HIDE]+[[x] WEEP]→[[[x_i] WEEP] WHILE [[x_i] HIDE]]

例 (8) で「付帯状況」類に属する「忍び泣く」の語彙概念構造の合成を示したように、「忍び泣く」は、前項動詞「HIDE」（「忍ぶ」を表す意味述語）と「WEEP」（「泣く」を表す意味述語）が表す二つの事象が同時進行するが、前項動詞「忍ぶ」が表す事象は主動詞「泣く」が表す事象に付随する事態であるため、「忍び泣く」のような名詞化できる語彙的複合動詞は「付帯状況」のタイプに属する。

③ 「手段・原因」類 ([LCS2] BY [LCS1])

前後項の意味関係が「手段・原因」類に該当する、名詞化できる語彙的複合自動詞は 28 語ある。例えば、

- (9) 「乗り越す」 例：席を守るのに熱中しすぎて、乗り越してしまうこともある。

$[[x] \text{ GET ON } [z]] + [[x'] \text{ PASS } [y]] \rightarrow [[x_i] \text{ PASS } [y_j]] \text{ BY } [[x_i] \text{ GET ON}]$

例 (9) で「手段・原因」類に入る「乗り越す」の語彙概念構造の合成を示したように、「乗り越す」は、前項動詞「GET ON」（「乗る」を表す意味述語）が表す事象が後項動詞「PASS」（「越す」を表す意味述語）が表す事象に先行し、前項動詞「乗る」が表す事象が後項動詞「越す」が表す事象の原因になるため、「手段・原因」類に属する。また、「食いつく」（「食うことによって付く」）のように、前項動詞が表す事象が、後項動詞が表す事象の手段である場合も、この「手段・原因」類に属する。

一方、前節で述べた他動性調和の原則に違反する「動詞+込む」の複合動詞を語彙概念構造のレベルで処理することについては、由本 (1997) によれば、語彙概念構造の分類においても特別なタイプと考えることができ、「動詞+込む」は、上の四つの語彙概念構造のパターンと異なり、「込む」自体の一定の意味作用に従い、語彙概念構造を形成すると言うことができる。また、この点については、英語の接頭辞とも似ていると考えられるが、「動詞+込む」の語彙的複合自動詞はいずれも語彙概念構造の「手段・原因」類に分類できるとも考えられる。例えば、前項動詞を「V1」で表記し、「駆け込む、飛び込む、乗り込む、殴り込む」などの概念構造の合成を簡略に示すと、すべて、 $[[V1] + \text{[込む]}] \rightarrow [V1 \text{ することによって、内側に入る}]$ と説明することができ、「手段・原因」類に該当すると言える。

また、前節で述べた他動性調和原則に反する「込む」を含まない複合動詞についても、語彙概念構造で説明することはできる。例えば、「行き止まる、行き当たる、持ち上がる」の前後項動詞は「手段・原因」の意味関係であり、「生き別れる」と「盛り上がる」の前後項動詞はそれぞれ「付帯状況」と「並列関係」の意味関係がある。

5.3 前項と後項動詞の連用形の名詞化の状況から見る

語彙的複合自動詞の連用形名詞は複合動詞の前項動詞の連用形が後項動詞の連用形と複合された組み合わせであるため、前後項動詞の連用形が名詞に転成することができるか否か、そして名詞化できた場合に、前後項動詞の連用形を単独で名詞として使うことができるかどうかは、語彙的複合自動詞の連用形が名詞化するプロセスに影響がある可能性があると思定される。したがって、本節では、語彙的複合自動詞における前後項動詞の連用形名詞化の状況を調べ、連用形が名詞化できる語彙的複合自動詞 (4.2.3 節で辞書とコーパスいずれも名詞化できると確認した 44 語) にある特徴を考察する。まず、辞書とコーパスで確認した分布状況をそれぞれ表 6-1 と表 6-2 に示す。

前後項動詞の連用形が単独で辞書「Dual 大辞林」の名詞語彙項目として立項されている場合、またはコーパス（BCCWJ）で自立的な名詞として使われた用例がある場合に、名詞化の状況を「可」と表記し、前後項動詞の連用形に補助形態素を加えたものが辞書の名詞語彙項目にある場合、又はコーパスで名詞として使われた用例がある場合は「補助可」、どのような形式でも前後項動詞の連用形が辞書の名詞語彙項目になくコーパスで名詞として使われた用例が見られない場合に、「不可」と表記する。例えば、「食いつく」の前項動詞「食う」の連用形「食い」と後項動詞「付く」の連用形「付き」は、辞書によると、両方とも単独の形で名詞の語彙項目にあり、コーパスにも名詞として使われた用例があるため、「可+可」のタイプとなる。一方、「付き添う」の前項動詞「付く」の連用形「付き」は、辞書とコーパスによって「可」のタイプに属するが、後項動詞「添う」の連用形「添い（そい）」は、単独で名詞の語彙項目としては確認できず、「添い寝」のような補助形態素と結合した形で名詞の語彙項目となり、コーパスでも使用されるため、「添う」の連用形の名詞化状況は「補助可」のタイプに属し、「付き添う」は「可と補助可の組み合わせ」になる。なお、「添い（ぞい）」は、名詞の語彙項目として辞書に存在するが、動詞連用形の「濁音化」が関わっているため、今回は「添う（そう）」の連用形名詞とは見なさない。また、「掛かり」は単独で名詞の語彙項目として辞書に存在するが、辞書には「掛かること」という意味は記載されていないが、動詞の連用形が名詞に転成する過程で語の意味の変化（意味の拡大或いは意味の縮小）が起きた可能性もあるため、本稿では「掛かり」を「掛かる」の単独で成立する連用形名詞と見なす。

表 6-1 前後項動詞の名詞化の状況による名詞化できる語彙的複合自動詞の分布（辞書）

前後項動詞連用形の名詞化状況の組み合わせ	辞書で確認した各パターンに該当する語彙的複合自動詞	
可+可	32 語	歩み寄る、生き残る、駆け込む、食いつく、忍び泣く、立ち回る、飛び上がる、飛び込む、取り付く、殴り込む、乗り込む、見回る、寄り集まる、行き止まる、生き別れる、居残る、移り変わる、落ち込む、切れ込む、焦げ付く、死に別れる、滑り込む、出来上がる、通り抜ける、成り上がる、跳ね上がる、跳ね返る、引っ込む、結び付く、持ち上がる、盛り上がる、行き当たる
可と補助可の組み合わせ	10 語	忍び会う、立ち退く、付き添う、飛び下りる、乗り越す、言い争う、討ち入る、向かい合う、生い立つ、触れ合う
可と不可の組み合わせ	2 語	返り咲く、凍え死ぬ

表 6-2 前後項動詞の名詞化の状況による名詞化できる語彙的複合自動詞の分布 (コーパス)⁴

前後項動詞連用形の名詞化状況の組み合わせ	コーパス (BCCWJ) で確認した各パターンに該当する語彙的複合自動詞	
可+可	34 語	歩み寄る、 <u>言い争う</u> 、生き残る、食い付く、 <u>忍び会う</u> 、忍び泣く、立ち回る、飛び上がる、飛び込む、取り付く、乗り込む、見回る、寄り集まる、行き止まる、生き別れる、居残る、移り変わる、落ち込む、 <u>返り咲く</u> 、切れ込む、焦げ付く、 <u>凍え死ぬ</u> 、死に別れる、滑り込む、出来上がる、通り抜ける、成り上がる、跳ね上がる、跳ね返る、引っ込む、結び付く、持ち上がる、盛り上がる、行き当たる
可と補助可の組み合わせ	8 語	討ち入る、 <u>駆け込む</u> 、立ち退く、付き添う、 <u>殴り込む</u> 、乗り越す、向かい合う、触れ合う
可と不可の組み合わせ	2 語	<u>飛び下りる</u> 、 <u>生い立つ</u>

上の表 6-1 と 6-2 に示したように、抽出された名詞化できる語彙的複合動詞の前後項動詞の名詞化状況をそれぞれ辞書とコーパスで確認すると、いずれもほぼ同じような分布であり、全体として前項動詞と後項動詞のうち少なくとも一方は単独で名詞化できる傾向が見られる。その中で、前項と後項動詞の両方が単独で名詞化できる「可+可」の組み合わせは全体の 3 分の 2 以上 (それぞれ 32 語と 34 語) を占め、圧倒的に最多のパターンであることがわかる。

5.4 連用形が名詞化できない語彙的複合自動詞にある特徴の略述

名詞化できる語彙的複合自動詞が持つ各特徴をより明確にするために、抽出された全 508 語の「VV 型」語彙的複合自動詞のうち、辞書 (Dual 大辞林) とコーパス (BCCWJ) のいずれでも名詞化できない複合動詞の中からランダムにいずれも名詞化可の語数に合わせて 44 語を (「遊び暮らす、流れ歩く」などの意志的な 21 語と「現れ出る、並び立つ」などの非意志的な 23 語) 取り出して考察した。連用形が名詞化できない語彙的複合自動詞にある特徴的な傾向については、以下のようにまとめられる。

表 7 ランダムに抽出された連用形が名詞化できない語彙的複合自動詞 (44 語)

種類	ランダムに抽出された名詞化できない語彙的複合自動詞	
意志的自動詞	21 語	遊び暮らす、言い寄る、帰り着く、食らい付く、忍び寄る、攻め込む、抱き付く、詰め寄る、飛び起きる、流れ歩く、泣き叫ぶ、逃げ去る、飲み潰れる、乗り入る、走り回る、跳ねのく、踏み越える、吠え付く、もたれ掛かる、寄り添う、分け入る
非意志的自動詞	23 語	現れ出る、生まれつく、生い茂る、消え去る、転がり落ちる、絡み付く、折れ込む、折り重なる、咲き残る、染み出る、過ぎ去る、流れ着く、照り輝く、突き立つ、吹き入る、舞い落ちる、湧き出る、並び立つ、迫り来る、勝ち誇る、覆いかぶさる、擦り切れる、付け加わる

⁴表 6-2 を下線を付している語は表 6-1 の辞書で確認した分類と異なる語である。

①名詞化できない非意志的自動詞の23語の中では、「非対格自動詞+非対格自動詞」のタイプ(18語)が一番多く、次に多いのが「他動詞+非対格自動詞」(3語)、「非能格自動詞+非能格自動詞」(1語)と「非対格自動詞+分類不能」(1語)のタイプである。一方、名詞化できない意志的な自動詞の21語は、割合が高い順にそれぞれ「非能格自動詞+非能格自動詞」(11語)、「他動詞+非能格自動詞」(5語)、「非能格自動詞+非対格自動詞」(4語)と「他動詞+分類不能」(1語)となる。これらの結果から、他動性調和原則による分類の視点から見ると、名詞化できる複合自動詞と名詞化できない複合自動詞には同じ傾向が見られることがわかる。

②語彙概念構造による前後項動詞の意味関係の分布について、名詞化できない複合自動詞の44語は「並列関係」に該当するものが一番多く(21語)ほぼ半数を占め、次に「手段・原因」(17語)と「付帯状況」(6語)の順であり、名詞化できる複合自動詞における分布(「手段・原因」が29語、「並列関係」が12語、「付帯状況」が3語)と比べると、後者の方が分布がより偏っていることがわかる。特に、「手段・原因」の意味関係のパターンにおいて名詞化できるものとできないものの差が最も大きいことから、前後項の意味関係は名詞化の可能性に影響する要素の一つと考えられる。

③名詞化できない複合自動詞前後項動詞の連用形の名詞化状況の分布は、前後項動詞が両方とも自立的に名詞化できる「可+可」のパターン(23語)が一番多く、5割を占めるが、名詞化できる複合自動詞の44語ほど圧倒的な割合(「可+可」が8割近くを占める)ではない。このことは、単純動詞としての前後項動詞の連用形名詞の独立性が、全体として名詞化できる語彙的複合動詞よりも低いことを示している、また、名詞化できる複合自動詞と異なり、「不可+補助可」のタイプ(4語)も存在する。

6. 考察のまとめ

本稿では「VV型」の語彙的複合自動詞508語を抽出し、辞書とコーパスを利用してそれぞれの名詞化の状況を確認した。特に、4.2.3節で辞書とコーパスのいずれでも名詞化できることを確認した44語を中心に取り上げ、他動性調和の原則、語彙的複合動詞の前後項動詞の意味関係と、前後項動詞の連用形自体の名詞化状況の三つの視点から、抽出された連用形が名詞化できる語彙的複合自動詞(44語)にある特徴を考察した。最後に辞書とコーパスのいずれでも名詞化できないことを確認した語彙的複合自動詞(ランダムに抽出した同じ語数の44語)と対照した結果、以下のようなことがわかった。

①語彙的複合自動詞の前後項動詞の意味関係の視点から見ると、名詞化できる複合動詞では「手段・原因」(28語)の分類に該当する語が七割近くを占め、最も多い。また、前後項動詞の意味関係に基づく分布は、ランダムに抽出された名詞化できない複合自動詞と比べると、大きな偏りが見られ、名詞化できない複合動詞の分布と明らかな差があることがわかる。これは、ほかのタイプ(「並列関係」と「付帯状況」)より、「手段・原因」のタイプに該当する複合自動詞が名詞に転成するプロセスを経て、より言語の「経済性」の結果に達することができる可能性があるためだと考えられる。したがって、名詞化できる語彙的複合自動詞において、前後項動詞に「手段・原因」の意味関係がある場合が多いことは大きな特徴の一つと言える、語彙的複合自動詞の名詞化の可能性と語彙概念構造に基づく前後項動詞の意味関係の間には関連があると言える。

②前後項動詞の連用形自体の名詞化状況の視点から見ると、名詞化できる語彙的複合自動詞では前項動詞と後項動詞が共に単独で名詞化できるケースが8割近くを占めて圧倒的に多い。名詞化できない語彙的複合自動詞でも前項動詞と後項動詞が共に単独で名詞化できるケースは多いが、その割合は5割に過ぎない。このことから、名詞化できる語彙的複合自動詞の前項と後項動詞はより名詞化しやすく、それぞれの名詞化の程度(自立性)もより高い傾向にあることがわかる。

③他動性調和の原則の視点から見ると、名詞化できる語彙的複合自動詞は、他動性調和原則に違反する語例も多少あるものの、大半は原則通りであることがわかる。この傾向はランダムに抽出された名詞化できない語彙的複合自動詞でも同様であり、この視点においては、名詞化できる複合自動詞と名詞化できない複合自動詞の間に大きな差はないことがわかった。

本稿で明らかになった、名詞化できる語彙的複合自動詞が持つ特徴が名詞化のプロセスとどのような関わりを持っているかについては、語彙的複合他動詞についても分析した上で検討する必要がある、紙幅の制約上、別稿にゆずることとする。本稿で取り扱った名詞化は動詞から名詞に転成するプロセスであり、名詞化を可能にする要因は転成する前の動詞にも転成した後の名詞にも関わっている可能性がある。また、本稿で扱った語彙的複合動詞では、その名詞化のプロセスに「複合+転成」のより複雑な語形成の過程が起こるため、さらなる考察が必要であり、それは今後の課題とする。

参考文献

- 影山太郎 (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社出版
- 須賀一好 (1983) 「現代語における複合動詞の自・他の形式について」『静岡女子大学研究紀要』静岡女子大学編(17),pp.328-340
- 鈴木重幸 (1964) 『語彙教育』むぎ書房
- 玉村文郎 (1970) 「現代語における居体言」『花園大学研究紀要』花園大学文学部編(1),pp.121-145
- 西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』日本語学会編(43),pp.60-81
- 西尾寅弥 (1982) 「自動詞と他動詞—対応するものとししないもの—」『日本語教育』日本語教育学会学会誌委員会編(47),pp.57-68
- 松田文子 (2002) 「複合動詞研究の概観とその展望—日本語教育の視点からの考察—」『言語文化と日本語教育』2002年増刊特集号,pp.170-184
- 由本陽子 (1997) 「動詞から動詞を作る」影山太郎・由本陽子『語形成と概念構造』研究社出版,pp.53-127(第2章)

辞書

松村明 編 (2015) 「Dual 大辞林 Web 版」(<http://djr1.dual-d.net>) 三省堂

データベース

国立国語研究所「複合動詞レキシコンデータベース」(<https://vvlxicon.ninjal.ac.jp>)

コーパスと例文出典

国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」データバージョン 2021.03 (中納言 2.4.5)

(<https://chunagon.ninjal.ac.jp>)

国立国語研究所と Lago 言語研究所「NINJAL-LWP for BCCWJ」データバージョン 1.40(<https://nlb.ninjal.ac.jp>)